2023 年度事業報告書

特定非営利活動法人パノラマ

2023 年度事業を振り返って

早いもので、本総会も第 10 回を迎えることができました。パノラマの活動を支えて下さっている理事、監事、会員の皆さまに熱く御礼申し上げます。法人の活動も 9 年目となり、12 月には「ぴっかりカフェ」が 10 周年記念を迎えます。記念イベントを開催したいと考えていますので、是非ご参加下さい。

さて、法人設立 10 周年という節目を前に痛感していることは、もはや、情熱や正義感に駆られた勢いだけでは、「前に進むこと」も「立ち止まること」も難しくなっていると感じている、という割とネガティブな感情を抱いていることを共有させていただきたいと思います。

この問題の根っこにあるものは、受益者負担の難しい方々を支援するソーシャル・セクターの社会的な位置付けや、それに伴う委託事業の委託費の安さや、助成金の成果・成長主義のあり方などがあり、今のままでは自分たちは消耗し、疲弊していくだけで、いつか使い捨てられてしまうのではないかという、今さらと言われれば今さら、強い危機感を持った 1 年になりました。

このような状況の中、私自身が目の前のクライエントのために役に立ちたいと思っていた支援者から、（支援者に片足を置きつつ）法人の運営やスタッフの人生の幸せを考える理事長として、成長しなければならないフェーズに突入しているということを強く自覚した 1 年でもありました。同時に、この問題の根っこにアプローチしていく社会運動家として成長していかなければならないと痛感する 1 年でした。

「前に進むこと」についての課題は、日々の活動を支え、維持しているスタッフたちの暮らしを保障し、労力に見合う対価の原資が、その下となる助成金や委託事業ではどうしても不足が生じてしまうという、行政の安価な下請け業者的問題が根底にあります。その不足を補うための寄付金集め等に、別のエネルギーや能力を割かざるを得ない現状があります。

「立ち止まること」は、窓を開けて新鮮な空気を吸い、さまざまな課題解決のための考えを、仲間たちとの語らいの中で巡らす時間のことです。ですが貧乏暇なしとはよく言ったもので、現場に日々追われ、持続可能性についての議論をスタッフ間でする余裕が全然持てていません。比較的私に時間的余裕を作り出しやすい状況にありますが、もはや私ひとりの情熱や正義感に駆られた勢いだけでは、組織を動かすことが困難だと感じている冒頭の実感に戻ります。

現在、経営・運営の課題に対して、外部のコンサルティングを活用した基盤強化事業に着手し、対策を練っているところです。なんとかこれらの作用がスタッフ全体に行き渡り、私自身の意識をアップデートさせることで、10 年目の新しいレールへ、ソフトランディングしていけるよう努力していきたいと思っています。

2023 年度の法人の活動を振り返ると、つながりを作るネットワークングの 1 年だったと思います。ひとつは「校内居場所カフェ全国ネットワーク」の誕生、そしてバイターン実施団体の拡大のための他団体へのコンサルティングの開始、さらに実行委員会形式で「かながわ中高接続支援ネットワーク」を組織しました。いずれもパノラマが発起人となり、前者 2 つは全国の支援団体に、後者は神奈川県内のカフェ実施団体を中心にお声掛けをさせていただきました。

これらの動きを振り返ると、自分たちだけの力ではどうにも動かしようのない領域にアプローチしていこうとした、チャンレンジグな 1 年だったとも言えると思います。また、パノラマが標榜してきた横浜の北部エリアで培った良いモデルを、全国にシェアし始めているとも言えます。制度の狭間に落ちていってしまう子ども・若者たちのために、多くの団体と手を取り合い、力を合わせ、大きな声にして、国や地方自治体に思いを届けていく。そんな団体を超えたプラットフォーム作りに奔走した 1 年になりました。

同時に地域の中にも、ネットワークの根を張ることのできた 1 年となりました。同じ青葉区で活動する認定 NPO 法人森ノオトさんと、フジロックの NGOVILLAGE で同じテントの中で社会課題をアピールしたり、森ノオトさんが主催する「あおばを食べる収穫祭 2023」へ 2 年連続で、若者たちがボランティア参加をしたり、本年度は NPO エリアでの出展などもさせていただき、たくさんの青葉区の方々がブースに寄って下さり、声を掛けていただきました。

これらのネットワーク構築でも、経営基盤や利害関係、異なる哲学や理念を抱えている多様な団体同士が集団を形成していくということの調整も、情熱や正義感だけでは前に進めることのできない領域でした。今まで使ってこなかった筋肉や脳みそを酷使した 1 年でありました。いろいろ意味でパノラマは不安定な過渡期に突入していると思います。スタッフ一丸となって、越えていく所存でありますので、皆さまのより一層のご支援、応援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

2024 年 6 月 25 日
特定非営利活動法人パノラマ
理事長 石井正宏

2023 年度事業一覧

1．子ども・学校支援事業部	
（1）子ども事業～青葉区寄り添い型生活支援「.5 てんご」	青葉区委託事業
（2）学校連携事業 ①高校入学前支援事業 ②朝食提供事業（朝 BORDER） ③校内居場所カフェ＋食支援事業（２校） ④校内個別相談（２校） ⑤ボランティアさん養成講座 ⑥卒業生・中退生支援 ⑦校内居場所カフェ全国ネットワーク設立準備委員会	神奈川県教育委員会委託事業／助成事業(WAM および全国食支援活動支援協会)
2．サードプレイス提供事業	
~~（1）居場所居酒屋「汽水」事業~~（現在休止中）	自主事業
3．若年者就労支援事業	
（1）有給職業体験「バイターン」事業 ①北部ユースプラザ・バイターン ②学校連携バイターン ③他団体へのバイターン導入支援	助成事業（東京海上日動キャリアサービス 働く力応援基金）
4．若者自立支援事業	
（1）よこはま北部ユースプラザ事業	横浜市補助事業
5. 中高年ひきこもり支援事業	
（1）ブリッヂ	自主事業
6. 啓発事業	
（1）校内居場所カフェ・スタッフ養成講座事業	自主事業
（2）各種広報事業	自主事業
7. 組織基盤強化事業	
（1）ファンドレイジング強化事業	助成事業（大和証券 G 未来応援ボンドこども支援団体サステナブル基金）

2023 年度事業報告

１．子ども・学校支援事業

（1）青葉区寄り添い型生活支援事業　.5（てんご）～事業概要～

生活困窮状態にあるなど養育環境に課題があり、支援を必要とする家庭に育つ小・中学生等の生活支援事業。将来の選択肢の幅を広げ、生まれ育った環境に左右されることなく学習習慣及び生活習慣を身につけ、自立した生活を送れるようになることを事業目標としている。また、当法人としては田奈高校との連携により中高接続支援の実現を目指すとともに、青葉区という地域と連携を深めることで切れ目のない支援の場づくりをしていく。

事業スタートから 2 年目となり、児童も 19 名とほぼ送迎可能な定員いっぱいの人数での運営となった。2023 年度は、1 年目で創り上げた事業のノウハウを改善しながら、練り上げていく 1 年であった。本事業においては、他の事業と異なり、居場所の運営だけではなく送迎というものが業務において占める割合がとても多い。送迎体制、送迎における課題、送迎から居場所にどう繋げていくか、送迎時の児童・保護者対応など、送迎に係るスタッフの体制や力量は本事業の要である。そんなことがより明確になった 1 年であるように思う。また、児童の人数の増加に伴ない、居場所スタッフとして求められる役割も多様になるとともに、保護者対応や緊急支援が多様化してきている。

今年度はスタッフは最大 13 名となり、スタートから中心的な役割を担っていたスタッフの入れ替わりなどもあった。そのような中で、今までは属人的なものに依っていたことを再度整理をして場で必要なことを言語化していくことが必要となった。人が多くなることで、おのずとスタッフ間の調整・連絡も多くなったが、そこを支えてくれていたのもスタッフであった。事業において、スタッフ体制、チームというのがいかに重要かということを痛感した一年でもあった。

保護者対応や緊急支援に関しては、今年度は関係機関と連携をしてご家庭をサポートをするケースが増えてきたように感じている。これは、昨年度関係機関と様々なやり取りをしたことで、それぞれができることや考え方についてのすり合わせが少しずつできているということが積み重なった結果であろう。また、居場所、アート、障がい、児童福祉、地域資源など様々な経歴を持つスタッフがいることで、それぞれの引き出しを使いながら、現場でも知恵を出し合

うことができるような体制になってきており、この土台を生かすことが事業の深化につながっていくであろうと感じる。

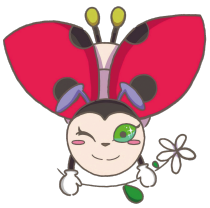
一方で、ここはじっくり考えていきたいねと話しながらも、日々走らざるを得ず、十分に時間を取って話すことができずにいることも多くある。次年度は、見通しを持った場の運営、事務業務の整理をすることで、スタッフ同士でじっくり話す時間というものも創っていきたいと思う。（小川）

.5（てんご）実績

	2021 年度（3/28～）	2022 年度	2023 年度
登録児童数	2 名	14 名	21 名
利用児童数	2 名	12 名	19 名
利用日数	－	215 日	223 日
利用人数（述べ）	3 回 ※前年度は回数カウント	547 名（延べ）	849 名（延べ）
送迎回数（延べ）		514 回	849 回

※前年度はよこはま北部ユースプラザの統計などを参考に見学者数を示したが、本事業では登録者数と実際の利用人数を示すこととする。

.



マスコット・キャラクターのてんごちゃん

（２）学校連携事業

①高校入学前支援セミナー相談会（旧称：入学前支援「ごぶごぶ」）～事業概要～

合格発表から入学式までの間に、希望する中学３年生と保護者に対して、県内のカフェ・マスターや支援機関に参加してもらい、セミナー相談会を実施することで、高校進学への不安を解消し、入学前に当法人やカフェ・マスターとの信頼関係を築いた状態で入学式を迎えてもらい、中退・進路未決定者数の減少を目指すと共に、早期に不登校や中退になった場合に、学校以外の相談できる若者支援機関の存在を認識してもらう。

高校入学前支援事前シンポジウムとセミナー相談会　振り返り

２月 24 日に、神奈川県内で校内居場所カフェを運営している以下の皆さんと、高校に校内居場所カフェがあることで、中高接続のリスクを減らし、中学校時代にクラスに馴染めなかったり、不登校を経験した生徒が「高校デビュー」を成功させるアタッチメントになり得る可能性について語り合うシンポジウムを開催しました。

登壇者
山中　梓さん（ようこそカフェ/公益財団法人 よこはまユース）
鈴木 健さん（ぽちっとカフェ/社会福祉法人青丘社）
水村 和史さん　（出張ぽるとカフェ／NPO 法人文化学習協同ネットワーク）
石井 正宏　（ぴっかりカフェ他/NPO 法人パノラマ）

本シンポジウムには、中学生の不登校支援をされている、水澤麻美さん （認定 NPO 法人 鎌倉あそび基地）をゲストにお招きしました。学校の外で支援をしている水澤さんが、校内居場所カフェの実践から、学校の中に入り込んだ支援の重要性を改めてから、感動を持って語っていただけたことがとても印象的でした。尚、本シンポジウムは神奈川新聞にも掲載していただきました。

2024 年 3 月 30 日には、不登校やいじめ等により、進学に不安を抱える新高校１年生のための高校入学前支援「セミナー相談会」を今年も開催致しました。日頃、高校生の悩みや不安に寄り添っているゲスト３名のお話がとても具体的で、励まされる情報が満載でした。妄想的に描いていた入学式のシチュエーションのようにはならず、誰とも話せない、誰も話しかけてくれない初日の「こんなはずじゃなかった…」という敗北感の対策をどうするのか？そんな子どもをお家ではどのように迎え入れてあげればよいのか？そんな時には電話相談に電話すると良いよ、嫌だったらガチャギリしていいんだよ、なんていう言葉が印象的でした。また、教室だけが居場所じゃない、部活に入ると自分

と似たようなタイプのクラスが違う子に出会える話や、アルバイト先の大学生たちはロールモデルになってくれる話、もしも学校に行きたくなくなったら、週に一度は計画的に休んじゃってもいいと思うよ、など、力んでいた肩の力が抜けるようなお話もありました。

学校の中の様子をあまり知らない支援者からも、大変勉強になったという感想をいただきました。残念ながら相談は少なかったのですが、多くの方に観ていただけるようYouTube で公開致しましたので、是非ご覧下さい。

「高校生ライフを楽しむ！入学から GW までの過ごし方」
スピーカー
・美濃屋 裕子さん（神奈川県 スクールソーシャルワーカー）
・塚越 祐希さん（養護教諭）
・山本 真理さん（スクールメンター）
司会
・石井 正宏（NPO 法人パノラマ）

YouTube はこちら

セミナー相談会 2023 年度実績

事前シンポジウム参加者数	16 名
セミナー参加者数	6 名
相談会参加者数	0 件

相談会参加団体：公益財団法人よこはまユース、特定非営利活動法人文化学習協同ネットワーク、認定特定非営利活動法人多文化共生教育ネットワーク、特定非営利活動法人子どもと生活文化協会、特定非営利活動法人パノラマ

後援：神奈川新聞、神奈川県教育委員会、横浜市こども青少年局、横浜市教育委員会、川崎市教育委員会、海老名市教育委員会、大和市教育委員会

②朝食提供事業（朝 BORDER）～事業概要～

「学校での食支援を通じて心身の健康の改善を図り、学習に取り組む姿勢につなげることや生徒が教職員以外の大人と話せる居場所を作ることで、大人が生徒の悩みに気付き、生徒一人ひとりに寄り添い、支援すること」を目指して 2022 年度より県内 4 校で始まった神奈川県教育委員会の委託事業。当法人では大和東高校の朝食提供事業を受託。

朝 BORDER 振り返り

神奈川県の委託事業として 2022 年度から始まった本事業。「朝の雰囲気の提供」をコンセプトに週に 2 回開催しています。本事業は、地域在住の 5 名のスタッフに関わっていただいています。（小川）

朝食提供事業の 2 年目を終えました。今年度は調理が可能になり、味噌汁や焼そばパンなど手作りで暖かいものが出せたことで、生徒の笑顔やホッとした様子が垣間見られました。途中から学校側の都合で使える部屋が変わり、直火が使えなくなったりと状況が厳しくなりましたが、スタッフのほとんどが 2 年目だったこともあり、工夫しながらなんとか時間内に提供できました。常連さんが顔を出さないとこちらが心配するくらい、一部生徒の間ですっかり定着してきています。「朝カフェがあるから頑張って遅刻せずに来るね」「来週のメニュー何？」など楽しみにしてくれています。
朝カフェは生徒たちの食の補償だけでなく、居場所にもなっています。「来年もまたあるんだよね？」という生徒からの声もあり、事業の終了で誰かの居場所がなくなることだけは避けないといけないなと感じます。（山本）

2023 年度実績

	開催数	参加生徒数	参加スタッフ数
2022 年	43 回	643 名／平均 15 名	延べ 90 名
2023 年	56 回	1673 名／平均 30 名	延べ 187 名

※2022 年 7 月 15 日～2023 年 3 月 10 日で実施

③校内居場所カフェ＋食支援事業（２校）～事業概要～

高校内に居場所カフェを開き、スタッフや多様なロールモデルであるボランティアさんと、日常会話から信頼貯金を貯めつつ、将来の糧となるヒト・モノ・コトの文化資本を高校生に提供する。中退や進路未決定の予防にとどまらず、将来的な社会関係資本への接続から経済資本の獲得を見据えた事業。

連携団体：一般社団法人お寺の未来（おてらおやつクラブ）、フードバンクかながわ 他

校内居場所カフェ振り返り

ぴっかりカフェは、田奈高校は運営方針の変化により、この数年で生徒層が随分と変化し、今年の１年生で完成形となったのではないかと思われます。ざっくり言えば外交的から内向的なドラスティックな変化なわけですが、外交的というのは困難や課題が外側に向かうので発見が容易なわけです。しかし内向的というのは実にわかりにくい。一見穏やかにカフェで楽しく過ごす、ある意味で過剰適応した生徒たちの、内面に渦巻く課題や困難はなかなか表面化しません。支援者としてはより高度なスキルが求められるカフェになっていると言えるでしょう。

例えば、クリスマス・パーティーで弾き語りやダンスを披露する生徒たちが消滅しました。これまでのようなクリパでは取り残される生徒たちが容易に想像がついたので、全員が楽しめるイントロ・クイズで大盛り上がりしました。それはそれで良いのですが、「誰も取り残さない」仕組みが過剰になると、困った人を見つけられない居場所になってしまいます。そのような意味での匙加減の調整、新たな生徒たちとのチューニングを合わせにいった年、そしてクリパの成功により合わせることに成功した年と言えるでしょう。来年度はここからどうズラすかがポイントになると思っています。

BORDER CAFÉ は、運営場所が生徒の動線から外れた２階多目的室から、動線上の１階ラウンジに移転したことで、生徒来店数が大幅に増えた１年であり、コロナ終息を経た２年目の朝食提供事業との相乗効果もあり、大いに盛り上がった楽しい日々を思い出します。同時に、カフェとバックヤードが隣り合っていた多目的室から、バックヤードまで歩いて１分弱のラウンジへ移転したことで、開閉店業務が煩雑になり大いに頭を悩ますことになった１年でもありました。

ただ、大人たちが困っているときに生徒たちの目が輝くのですね。真冬の寒い時期の、お湯の出ない流し場で、洗い物を率先して手伝ってくれる３年生の生徒たちが毎回いました。卒業を控え、春にはバラバラの進路を辿る生徒たちが、１分１秒でも学校の中での友との思い出を紡ぎ出そうとバカ騒ぎしている姿に、私は神々しくも儚い輝きを見ていました。彼ら彼女らが高校生活を思い出す時、あの暗い廊下の突き当たりの詰めいた水の感触が蘇るのでしょうか。親でも先生でもないカフェの大人たちに優しくされた経験も一緒に思い出してもらえたらいいなあ、などということを思うのでした。（いしい）

2023 年度実績　（ ）内は前度の実績

カフェ名/実施校	開催数	参加生徒数	ボランティア参加
ぴっかりカフェ 神奈川県立田奈高校	36 回 （29 回）	1,060 名／平均 29 名 （873 名／平均 30 名）	204 名 （136 名）
BORDER CAFÉ 神奈川県立大和東高校	32 回 （31 回）	1,565 名／平均 43 名 （1,202 名／平均 39 名）	84 名 （69 名）
合計	68 回 （60 回）	3,830 名／平均 56 名 （2,075 名／平均 49 名）	288 名 （205 名）

※食支援（食べ物配布会）実施回数
　ぴっかりカフェ：10 回、330 人の生徒に配布。
　BORDER CAFÉ：11 回、523 人の生徒に配布。

④個別相談事業「Drop-in」～事業概要～

　カフェで早期発見した課題を、信頼貯金を使いながらソーシャル・ワークへと発展させていく。教員が気づいてない世帯の課題や、発達障害等を発見し、学校やSC、SSW 等の専門職と共有することで、中退や進路未決定を予防するとともに、中退後のサポートを可能とする基盤作りを目的とした事業。年間８０件程度の個別相談を実施。田奈高校は北部ユースプラザの出張相談事業に位置づけている。

個別相談事業「Drop-in（どろっぴん）」の振り返り

　2023 年度の個別相談事業は、田奈高校のみでの実施となった。

　大和東高校では、食等に関する緊急支援や既存の制度ではサポートしきれない生徒の支援に関する相談が入ってくることがあり、現在 SSW（スクールソーシャルワーカー）や SC（スクールカウンセラー）、メンター等では対応しきれない部分のニーズに一定程度対応できたのではないかと感じています。特に、校内に設置した食支援の棚を先生や SSW に活用いただくことができました。

　田奈高校では、校内居場所カフェから繋がる相談が多くありました。昨年度はバイトに関わる相談が多くありましたが、今年度は人間関係や家庭のことなどの相談が多く、今年度は、バイターンとして実際に動きだした生徒が１名いました。先生からの新規のリファーが今年度は少なくなっており、先生たちの入れ替わりが多くある中で、改めてDrop-In やカフェの活用のしていただき方については丁寧にお伝えしていかなければならないなと感じています。

2024 年度は、これらの校内での周知に力を入れていくとともに、校内居場所カフェの実施日と重ねることで、カフェに来店する卒業生の相談を受けれるような体制にすることを目指していく予定です。（小川）

2023 年度実績　（ ）内は前度の実績

	開催数	相談件数
神奈川県立田奈高等学校	26 回（20 回）	21 件（40 件）
神奈川県立大和東高等学校	0 回（8 回）	0 件（8 件）
合計	26 回（28 回）	21 件（48 件）

※相談件数は前年度までは「〇名」表記であったが、件数とする。

⑤ボランティアさん養成講座～事業概要～

先生でも親でも支援者でもない、フラットな立ち位置で生徒と接していただくボランティアさんに、ミッションの理解や、引きこもり等の若者が置かれている実情（対処型支援）を知ることで、校内居場所カフェ（予防型支援）の意義と価値をご理解いただき、コンプライアンスへの誓約をしていただく。

2022 年度より後述する朝食提供事業がスタートしたことにより、朝食提供事業のボランティア・準スタッフも養成講座を受講することで参加いただけるようにしている。

ボランティアさん養成講座の振り返り

ボランティア養成講座の課題は、養成講座から実際のボランティアにつながることが非常に少ないことです。この理由を推測すると、ちょっと子どもの貧困や虐待など、きつい情報が多過ぎることが理由のような気がします。よって、昨年度末から、参加すると楽しいボランティアであることを強調するようにしています。親でも先生でも支援者でもない大人＝ボランティアさんの存在が、パノラマのカフェには絶対に必要だと感じているので、養成講座はコンスタントに続けていきたいと思います。

2023 年度実績　（ ）内は前度の実績

	開催数	参加数
オンライン開催（新規）	0 回（1 回）	0 名（5 名） ※前年度は自団体開催ではないため未カウント
リアル開催	3 回（2 回）	15 名　（4 名）
合計	3 回（3 回）	15 名（9 名）

⑥中退者・卒業生支援～事業概要～

卒業生や中退生の支援は、カフェが起点になり始まることが多くあります。卒業後にふらっとやってきて、少し心配な話があり、そこから相談がスタートするケース。カフェボランティアに来てくれている中で、相談へと切り替わっていくケース。そして、LINE でのつぶやきから相談がスタートすることが多く、多くが対面で会って話をしてというよりも、日常会話を含めた細々とした LINE のやり取りの中で、少しずつ少しずつ相談の概要が見えてくることも多いのが大きな特徴です。

パノラマでは、公式 LINE を作り、卒業生や中退生に渡す「おまもりカード」に掲載をして配布しています。また、卒業後や中退後の相談の中には生活困窮や家庭からの分離など、制度のすき間の緊急支援も多くあることから、「フレームイン基金」を立ち上げ、随時寄付を募っています。

←「フレームイン基金」ご寄付はこちらから

中退者・卒業生支援の振り返り

今年度は 17 件の相談がありました。労働上のトラブルから、家庭のこと、そして生活困窮等様々な相談がありました。今年度改めて、カフェへの卒業生・中退生の来店をカウントをする中で、やはり卒業生が帰って来ることが多いほど、「出会いなおし」が生まれ、そこから何らかの相談がスタートする機会が多くなるのではということが見えてきました。学校を離れ、仕事や自身の家庭のことに直面することが増えたり、自身の家庭を持つ中で新たな悩みが出てきたり。卒業・中退で区切りとするのではなく、帰ってこれる場所があるということの意味を感じています。

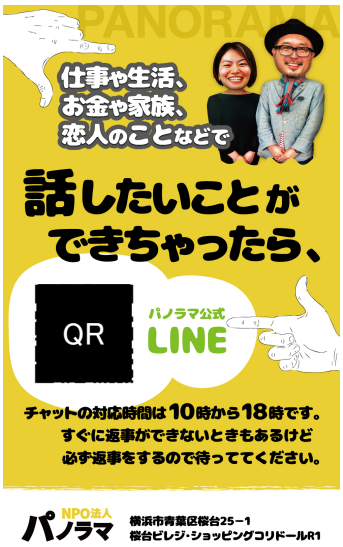
卒業生・中退生支援は「相談」ばかりを集計でカウントしてしまいがちですが、嬉しい報告も色々とあった 1 年でした。一人暮らしを始めた話、仕事を頑張っている話、好きな人ができた話。こんなちょっと嬉しい報告には親戚のおじさん・おばさんのような返信を石井と 2 人でしてしまっています。中には、ボランティアさんや地域の方経由で「風のうわさ」として報告を聞くこともあり、これからも校内居場所カフェや様々な取り組みを通じて、若者を地域で見守る一歩がつくっていければと感じています。(小川)

2023 年度実績　（　）内は前度の実績

	対応者数

中退生	6 名（4 名）
卒業生	69 名（8 名）
合計	名７５名（12 名）

卒業式や卒業生の来所時に配布しているお守りカード



⑦校内居場所カフェ全国ネットワーク設立準備委員会～事業概要～

校内居場所カフェ全国ネットワーク設立準備委員会（以下、全国ネット）は、WAM の制度化検討委員会や WAM のコンサルテーションを通じて、制度化を目指すのならば、1 団体で声を上げるのではなく、全国で居場所カフェを運営する複数団体の総意として、政策提言をつくり、国に訴えるべきとの助言をいただいたことからはじまった。

全国の 4 団体にお声かけをしたが、1 団体が考え方の違いにより全国ネットには入らないことを表明され、以下の 3 団体と全国ネット準備委員会として活動を開始している。離脱の理由は、質の担保ができないまま予算だけがつくことによる質の低下の懸念であったが、予算がつかない不安定な運営状況のなか、質の向上どころか、運営の継続自体が難しい現状があり、当法人としては、校内居場所カフェスタッフ養成講座の準備もあり、全国ネットを通じて、質の向上に貢献していく所存で、本事業を進めている。

幹事団体

1. NPO 法人パノラマ
2. 認定 NPO 法人 Switch（宮城）
3. NPO 法人しずおか共育ネット（静岡）
4. 認定 NPO 法人心燈（長崎）
5. NPO 法人こどもソーシャルワークセンター（滋賀）
6. 公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会 Youth+ポプラ（北海道）

2023 年度の校内居場所カフェ全国ネットワーク設立準備委員会振り返り

全国ネットワークは、HP 上から会員募集ができるところまで漕ぎ着けることができました。幹事団体のコミュニケーションは、円滑ではあるものの、団体間の温度感の違いや、法人の規模的体力感にも差があり、スケジュール調整を含む、意思決定のプロセスと実際のアクションには時間がかかり、事務局の負担感は非常に大きなものがありますが、着実に一歩ずつ前進できているという手応えも感じているところです。

現在は WAM 助成金で運営し、当法人が事務局を担っているが、本助成金終了後の維持の形を早急に検討していかなければ、活動頻度が落ち形骸化してしまう恐れがあります。また、新たな助成金を得るために、全国ネットワークの法人化、あるいは、全国ネットを絡めたパノラマが資金調達をしていかなければならない。（いしい）

３．若年者就労支援事業

（１）有給職業体験バイターン～事業概要～

働くことに強い不安を抱え、アルバイトに就けない生徒や引きこもり等を経験した若者がいる。就職協定から切り離した福祉的マッチングを必要としている生徒や、通常の履歴書/面接を経た就労が困難な若者が多くいる。このような生徒が、進路未決定からひきこもり等に陥るリスクが極めて高く、引きこもり等の若者たちの出口支援として就労支援がなければ、経済的自立状態に辿り着くことができない。“安心できる大人”のいるアルバイト先を紹介し、3 日間の無給の職場体験を経て有給のアルバイトとなり、働くための基礎体力をつけ、一般の就職活動をしてもらうか、そのままアルバイト先での就職を目指すことを目的とした事業。

有給職業体験バイターンの振り返り

今年度の前半は、就労に進める段階の若者が少なく、なかなか動きがなかったが、協力企業として新規登録して下さった企業の「見学会」というカタチで、無給体験の前にスモールステップを設置したことにより、実際に勤務先まで行くことで通勤経路を確認したり、職場を見たりすることで働くイメージができ、バイターンへ進む若者が 3 名出ました。

年末には、バイターン中の若者同士が「仕事納めはいつか？」などの話題を居場所でする姿が見られ、バイターン手前の若者もそれをさりげなく聞きながら「自分もそのうち…」と受け止めるなど、居場所の成熟度への貢献も見られました。

一方で、バイターンを検討し体験へ進んだが、自身の課題（対人不安の大きさ、注意されたことを過剰にネガティブに捉えてしまうなど）が浮き彫りになり、向き合わざるを得なくなったことで医療につながるなど、バイターンは辞退になったものの、若者にとってはアセスメント的な意義を感じる機会にもなりました。これは、手帳や受給者証がなくても体験できるバイターンだからこその結果であり、バイターンを経たことで福祉の波に乗れることが、ひとつの「自立」につながるというのを改めて感じました。

また、バイターンの実施を希望する NPO 法人 Switch（宮城県）、NPO 法人心澄（長崎県）、NPO 法人こどもソーシャルワークセンター（滋賀県）、静岡県浜松市の定時制高校を中心とした支援団体の方々に対して、主にスタッフ研修という形で、バイターン開始セミナーを実施させていただきました。

ニーズの背景としては、出口支援を持たない支援機関のスタッフの閉塞感と、支援者なら誰もが持つであろう、出会った責任を果たしきれない無念さを、このバイターンを使って晴らしたいという現場の強い思いがあるようでした。実際、セミナー中の他法人のスタッフたちの目は真剣そのもので、少しでも当法人のエッセンスを我が物とし、担

当する若者たちに還元したいという使命をひしひしと感じました。改めて、自分たちがパイオニアであることを自覚すると同時に、強い責任を感じる機会にもなりました。

【バイターンの他エリア展開のための PR 動画の作成】

- スタッフ 6 名に対するインタビュー
- 受け入れ企業 2 社に対するインタビュー
- バイターンの概要説明案メーション動画/ダイジェスト版動画

実施校：神奈川県立田奈高校
実施機関：よこはま北部ユースプラザ

【2023 年度の実績】

	2022 年度	2023 年度
参加延べ人数	22 名（田奈高校 1 名含む）	18 名（田奈高校 1 名含む）
体験延べ回数	44 回	11 回
参加者数	6 名 内訳：採用 5 名、辞退 1 名	7 名 内訳：採用 1 名、辞退 6 名、
採用者	5 名 内訳：就労継続中 3 名、中途退職者 2 名	1 名 内訳：中途退職者 1 名
受け入れ企業数	4 社 内訳：中古車販売店、WEB 関係、デイサービス、パン屋	4 社 内訳：清掃業、動物広場、デイサービス、美容院
新規・再発掘企業数	2 社 内訳：デイサービス万葉のさと青葉台、Bakery Cafe COPPET 青葉台店	3 社 内訳：ボイス、ふれあい動物広場、イタリアンバルバンビーノ

４．若者自立支援事業

（１）よこはま北部ユースプラザ（横浜市補助事業）～事業概要～

不登校、ひきこもりなどの思春期・青年期の総合相談や自立に向けた若者の居場所の運営をするほか、地域で若者の支援活動を行っているＮＰＯ法人等の団体や区との連携を図り、地域に密着した活動を行うことを目的として、横浜市が設置し、ＮＰＯ法人等が運営する施設です。対象は、都筑区、青葉区、港北区、緑区の北部エリア４区を中心に市内在住の 15 歳から 39 歳までの若者とそのご家族。常に５名体制で運営し、事業内容は横浜市の仕様に則った以下に加え、独自にバイターンや、高校への出張相談事業を加えている。

総合相談（電話相談、来所相談、家庭訪問等）

1. 区役所におけるひきこもり等の困難を抱える若者の専門相談の実施
2. ひきこもりからの回復期にある若者の居場所の運営
3. 社会体験・就労体験のプログラムの実施
4. 地域の関係支援機関、区役所との連携及び地域ネットワークづくり
5. 応援パートナーの養成・派遣

よこはま北部ユースプラザ振り返り

次の５年に向けた事業のコア・コンピタンスの確認とスタッフのチームワーキング

2023 年度は横浜市からこの事業を受託して５年目にあたる節目の年でした。夏季には次の５年間に向けたプロポーザルがあり、改めてこれまでの５年間の総括と次の５年間の現実的な青写真を描く必要が問われました。しかし、それは決して平坦ではなかったように思います。むしろこの５年間にじわじわと生じてきた課題が表面化し、これにどう対処しつつより良いあり方を模索するか悩み続けた１年だったように思います。

コロナによる影響も挟みつつ、2019～2023 年度までの５年間で、北プラの支援内容は着実に発展してきました。それは、回数を重ねて取りこぼしを減らす丁寧なインテイクや継続面談、様々な機関との緊密な連携や同行支援による齟齬の少ない支援の引き継ぎ、自由度が高く多様な選択肢に基づいて主体性を育む居場所の運営、生きていくために本当に必要な知識を身に付けたりかけがえのない体験を積むことができるプログラムの充実など多岐に及んでいると考えています。それは一見すれば支援メニューの多い、より良い支援現場のようにも見えつつ、反面で利用する利用者層の多様化と北プラの支援が担う機能や役割の多様化を下地に、肥大化する業務量の中で、個別の面談ではより

一層専門的で属人的な要素が増え、居場所ではスタッフの手数が必要な小グループのプログラムが同時にいくつも生まれる状況が常態化することでもありました。スタッフの疲弊はじわじわと進行し、次第に限られたスタッフのリソースを何に当てていくのか優先順位を決めなければならない局面が増え、その反面でスタッフ間のコミュニケーション機会は減少していきました。

そういった中でも、2023 年度は実績ベースでみると、ポスト・コロナ期におけるベンチマークが垣間見られた年でもありました。ポスト・コロナ期においては利用者の若年化がじわじわと進んでいました。それはこれまでには支援現場に現れてこなかった層、例えばひきこもってはいないものの学校になかなか居場所を見出せない不登校の学生や、社会的孤立には至っていないものの在学中に機会を奪われ自立へのモチベーションを見失ってしまった既卒者など、旧来なら学内のスクールカウンセラーが支えていたり、フリーターとして一先ずは社会を漂流していた層が、新規利用者として現れてくるようになっているからです。それは、これまでのひきこもり支援で見られた、所属先もなく確たる行き先もなかった若者を段階的に就労や進学に繋いでいくような単直線的な支援プロセスではなく、卒業までのある種のモラトリアム期間を支えたり、再び生きる意欲が喚起されるような些細な日常を支えるなど、支援プロセスも複雑で、スタッフとしては辛抱強く関わり続けることがより一層求められるような支援プロセスになっていっているということでもあります。

スタッフは改めて北プラとは何を行う支援現場なのか、そのコア・コンピタンスについての逡巡を繰り返しながら現場に臨んでいたように思っています。（織田）

よこはま北部ユースプラザ実績

	2021 年度	2022 年度	2023 年度
開所日数	283 日	271 日※コロナ対応で 8 月 3 日から 8 月 6 日まで居場所は休止	282 日
利用者数（本人・保護者･関係機関を含む）	延べ 3,895 名	延べ 3,471 名	延べ 3,602 名
新規来所者（見学･保護者のみ含む）	79 名（本人性別：男 27 名、女 52 名）うち 34 名が新規登録	94 名（本人性別：男 21 名、女 73 名）うち 44 名が新規登録	103 名（本人性別：男 67 名、女 36 名）うち 38 名が新規登録
応援パートナー登録数	延べ名 31 名（個人登録 29 名、団体登録 2） うち新規：個人登録 13 名	延べ 38 名（個人登録 33 名、団体登録 5 ） うち新規：個人登録 4 名	延べ 36 名（個人登録 31 名、団体登録 5 団体）うち新規：個人登録 1 名、団体登録 3 団体
応援パートナー実施回数	24 回	38 回	６９回

北部ユースプラザのマスコットキャラクターたち

5.中高年ひきこもり支援事業「ブリッヂ」

（1）オンラインによる会話サービス「ブリッヂ」～事業概要～

人と会う負担が少ないオンライン・コミュニケーション・ツール ZOOM を使い、ひきこもり支援の専門家が、遠くの友人のような関係性を継続的に提供し、ご自宅での「生活の質」の向上をサポートすることで、次の一歩への橋渡しをゆるやかにアシストする 40 歳以上のひきこもり者に対する実験的な支援事業。本事業は、クライエントと以下の 3 つの約束をして行う。①人に会うこと、働くことを強要しない。②相談を強要したり、家には行かない。③あなたらしくいることを尊重する。

	2021 年度	2022 年度	2023 年度
保護者等相談	2 件	0 件	0 件
利用者数	0 人	0 人	0 人
オンライン会話数	0 回	0 回	0 回

オンラインによる会話サービス「ブリッヂ」振り返り

相変わらず利用申し込みがない状況が続いています。その代わり、毎月 1 回オンラインで開催している、異業種ネットワーク 8050 問題の支援の在り方について考える「R40 勉強会」が充実した活動となっています。参加メンバーは固定の方々と不定期の方がいますが、主には以下のような高齢者支援をされている方々が参加しています。

・青葉区の地域ケアプラザ所長と地域連携スタッフ
・緑区の地域ケアプラザのスタッフ 2 名
・上記ケアプラザのケアマネージャー
・青葉区の訪問看護ステーション所長とスタッフ
・弁護士
・北部ユースプラザ織田

ひきこもり支援者は概ね 39 歳までの支援スキルしかありません。高齢介護支援者は引きこもり支援を知らないという状況があります。ひきこもり支援者であるパノラマは、高齢となった保護者の受けられるサービスや、日々の衰え、それに伴う家庭内の変化な

どを知りません。お互いの知らないを補い合うことを本勉強会の主な目的となっており、互いの知識をシェアした先に、8050 問題の支援の在り方が見えて来るのではないかと考えており、その目的が見えてきた 1 年となり、8 月 1 日はオンラインでの成果報告会を開催することができました。

北部ユースプラザには 39 歳までの年齢制限があり、制限を越えてしまう方々への支援をどのように継続していくか？ 40 歳以上の中高年ひきこもり支援の社会的インフラが、現在まるでない状況に対するアドボカシーや、北部エリアでの途切れのない支援を実現させるために取り組んでいきたいと思います。

６．啓発事業

（１）校内居場所カフェ・スタッフ養成講座事業

本養成講座は、参加費も安くなく、拘束時間も長い講座ですが、参加者の満足度は非常に高く、特に参加者同士の交流や、その後のオンラインでの交流など、大きな手応えを感じられる講座になっています。その一方で、大阪・東京では参加しにくい方々や、スケジュールが押さえられず参加できない方がいる点が課題であると感じています。
2023 年度は、以下の講座を開催することができました。

・基礎知識編@東京 5 月 27～28 日 参加人数 18 名
・基礎対応編@東京 9 月 23～24 日 参加人数 14 名
・基礎対応編@大阪 11 月 25～26 日 参加人数 6 名 計 38 名

いずれも基礎対応編@東京の様子

7. 基盤強化事業

（1）ファンドレイジング強化事業　～事業概要～

法人として、資金使途に制限のない寄付金が少なく、子ども・若者を支える側の体制が脆弱であるという課題を持つため、「大和証券グループ未来応援ボンドこども支援団体サステナブル基金」に応募。本助成金により、外部コンサルの伴走支援をいれながら、ファンドレイジング機能の強化に取り組んだ。（事業名：寄付者とのコミュニケーションを活性化させ、こども・若者を支える基盤を強固にするためのファンドレイジング強化事業）

ファンドレイジング強化事業 振り返り

認定 NPO 法人アカツキに伴走支援いただき、パノラマのファンドレイジングの現状を分析した上で施策を練り、①ファンドレイジング基礎ツールの整備、②寄付キャンペーンを行いました。①では 1. 法人 HP のスマホ対応、2. 法人のロゴとパンフレットの作成、を行いました。「パノラマらしい寄付キャンペーンとは何か」を、アカツキさんと一緒に丁寧に議論しながら進め、パノラマの子ども若者の体験格差に焦点をあて、「子ども・若者の日常に“ささやかな喜び”をもたらす“プラスαの体験”を提供したい」というタイトルでキャンペーンを組み立て実施しました。結果、約 1 ヶ月のキャンペーンで 119 人もの方から総額 1,077,827 円のご寄付をいただくことができました。本キャンペーンの成功により、ファンドレイジングノウハウを習得するとともに、新たな寄付者層を獲得し、子ども若者の現状や制度の隙間の問題、パノラマの事業について知っていただくなど、コミュニケーション機会が創出されました。法人の事業が拡大し、フェーズが変わる重要なタイミングにおいて、外部コンサルの外からの視点を入れて議論しながら法人の基礎を固めることができ、有形・無形の財産を手に入れられた 1 年だったと思います。（写真左：キャンペーンチラシ、写真右：法人パンフレット中面、パノラマロゴは p.1 をご参照）

※定款第 5 条(2)その他の事業の実施なし

以上